# *The Fixer* における抵抗する善人の有効性

新 田 玲 子

## 1．序

1966年に発表された *The Fixer* は，発表当時から評価が二分している。肯定的な評価をしたものとしては，1967年の *Critique* に発表された Marc Ratner 氏の論文や，1974年刊の Robert Ducharme 氏の *Art and Idea in the Novels of Bernard Malamud* が挙げられる。Ratner 氏は，"The Fixer seems to mark a further development toward a greater heroic commitment"[1]と述べ，また Ducharme 氏は，この作品では主人公の内面的成長が初めて社会的義務の自覚を伴い，現実の圧力に抵抗できる力強い道徳者を作り出したとみなし[2]，両者とも *The Fixer* を，それまでの Malamud の作品を越えるものと賞賛している。

一方否定的な批評としては，1967年の *Massachusetts Review* に発表された Stanley Elkin 氏の論文や，1968年の *Adversity and Grace* に収録された Giles Gunn 氏のものが挙げられる。Elkin 氏は，"We hail every hold-out with our tears and Yakov Bok is such a hold-out and we hail him. But it's still irrational."[3]と，最終場面で政治的ユダヤ人を意気揚々と主張する Yakov に説得力がないことを指摘するだけだが，Gunn 氏の批判はもっと厳しい。

Yakov becomes too quickly an apostle for freedom and liberation and thus loses his potentially beautiful and disarming specificity as a concrete, particular individual.[4]

Yakov の軽率な政治的姿勢が，かえって本来のすばらしい個性を失う結果をもたらしたとみなす Gunn 氏は，Yakov の変化について完全に否定的である。

このように，批評の対象になっているのが，主として，*The Fixer* で新たに提示された Yakov の生き方であり，それをいかに評価するかという点に，作品全体の評価の違いも生じている。そこで，以下拙論においては，*The Fixer* を再評価するため，この作品において主人公 Yakov の精神的指導者とみえる，Shmuel と Bibikov のそれぞれの資質，Yakov が両者の資質を受け継ぐ過程，およびその結果を踏まえ，社会的性格を帯びた抵抗する善人がどれほど説得力をもって描かれているか検討してみたい。

## 2．Shmuel と Bibikov

Yakov の義父であり，ユダヤ的特色を体中に匂わせている Shmuel の生き方は，彼が Yakov に向かって繰り返し使う，"charity" と "patience" に表わされている。例えば Shmuel は，乞食をむげに追い払う Yakov に対し，"Charity you can give even when you haven't got."[5]と戒める。また，家出した妻の不貞を苦々しく責める Yakov を，"If you had

been more patient she wouldn't have left you."[6]としかる。Shmuel は，世界は物質的に貧しいものであると考え，限りある物質世界の中で，互いに思いやることによって無限の精神を持ち，焦らずあわてず平和に過ごしている。このような生き方は，Shmuel と馬が，共にやせ細った惨めな姿をさらしながら，"They asked little from each other and lived in peace."[7]と，描写されることにも窺われる。つまり Shmuel は，精神的な豊かさを軸に，どん底の生活にも忍耐強く生きる善人なのである。しかし反面，彼の態度は受け身的で，過ちを正して善人が豊かに暮らせる世界を作ろうとする，積極的行動は起こせない。

Yakov 事件のロシア人捜査官であり，検察側に立ってなお正義を重んじる唯一の人 Bibikov は，Shmuel よりももっと積極的で現実的な生き方を主張する。この主張は，Spinoza について Yakov に説明する，次の台詞に明白に示されている。

"Spinoza conceded a certain freedom of political choice.... He also thought man was freer when he participated in the life of society than when he lived in solitude as he himself did. He thought that a free man in society had a positive interest in promoting the happiness and intellectual emancipation of his neighbors."[8]

Bibikov にとっては，内面が立派なだけでは十分でない。豊かな内面は現実の生活に反映され，現実を改善する実際的な効果を挙げなければならない。そして，現実の改善には，社会を実際に動かす政治に加わる必要があるので，彼にとって，社会的生き方は政治的生き方でもある。もっとも，積極的な政治参加は決して Spinoza 本来の主張ではないので，Jeffrey Helterman 氏は，"Bibikov uses Spinoza to rationalize his political position of serving a regime"[9] と批判している。しかし Bibikov が Spinoza をどれほど理解していたかは，ここでは問題でない。大切な点は，Bibikov が，人を思う気持ちを具体的な政治行動に表わす現実的価値観を体現しながら，現実の悪に潰されてしまうことである。

Bibikov は体制側に立ち，組織の中で積極的に正義を行なってゆこうとする。ところが，簡単に変化しない現実の悪は，Bibikov を社会的に破滅させる。すると彼は己の惨めな状況に耐えきれず，自殺してしまうのである。これは，彼を行動に駆り立てた現実的価値観故に，社会的破滅が存在意義の喪失を意味したことを示しており，現実性は実際行動を引き起こすけれども，苦境を耐え忍ぶ力にならないことを露にしている。

結局，Shmuel も Bibikov も人を思いやる正しい心の持ち主であり，それぞれのやり方で善意を実行して生きている。しかし，Shmuel は積極性を欠き，Bibikov は忍耐強さを欠くために，どちらもよりよい世界を作り出すことに大きな貢献はできないのである。

## 3．Yakov

さて主人公 Yakov は，作品の初めからすでに，Shmuel の精神性も Bibikov の現実性も内包している。例えば，逮捕されてまだ間もないとき，Bibikov から Spinoza の解釈をめぐって，束縛された人間がどうして自由でありえるのかと聞かれ，次のように答えている。

"That's in your thought, your honor, if your thought is in God. That's if you believe in this kind of God; that's if you reason it out. It's as though a man flies over his own head on the wings of reason, or some such thing. You join the universe and forget your worries."[10]

Yakov がここで説明している肉体から切り放された精神の自由は，Shmuel の精神的生き方に他ならない。反面，Yakov は決して Shmuel の精神の自由を認めることはない。それどころか，作品の初めでは，現実に甘んじている Shmuel を苦々しく批判してさえいる。Yakov は Shmuel のあまりに惨めな生活に我慢できないのであり，この態度は，実際には何の手助けもしてくれない神に，"Today I want my piece of bread, not in Paradise."[11]と抗議するような，現実的価値観に基づいている。そしてこの現実的価値観こそ，政治参加の必要性を説く Bibikov の価値観である。

このように Yakov は，初めから Shmuel 的精神性も Bibikov 的現実性も持ち合わせているが，作品の初めにおける Yakov が二人と決定的に違う一点がある。それは，村を出る理由について，"he blamed fate and spared himself"[12]と描かれたり，逮捕の初め頃，"I am not a political person"[13]と述べることに示唆される，自己中心的な態度である。そもそも，Yakov が村を捨て，新たな土地に幸福を求めて飛び出すのも，彼の考えるよりよい生活が自分自身のより豊かな生活でしかないことを示している。つまり Yakov は，人はもっと幸せに暮らせるはずだと考えられても，間違った社会を少しでも住みやすくするために自分が負っている責任に，まだ気付いていない。そのため，村に留まって現状を変えるための苦しみを引き受けることもできないし，また，村を離れるとき Shmuel に僅かの施しをしてやるつもりでいながら，自分の苦しみに気を取られて，結局し忘れてしまうというふうに，内包する良さを活かせない不毛な人生を送っているのである。

## 4．牢獄生活の寓意

さて，*The Fixer* の大半は，より豊かな生活を求めてやってきた Kiev で，キリスト教徒の子供殺しの犯人にしたてられた Yakov が，裁判を待ちながら牢獄での生活に耐える姿を描く。そして，この苦しい生活を通して，Yakov はそれまで活かされていなかった良い資質を実践し始めるのである。

最初に Yakov が何かを学んだとみなされる印は，Bibikov の自殺の後にみられる。それまで Yakov が出会った囚人達は，自分の苦しみに精一杯で，互いに同情しあう余地はない。しかし，自分を救ってくれる唯一の望みだった Bibikov の死で絶望に追いやられた Yakov が，その苦しみを耐えるために牢獄の中を歩き回り，足を痛めて，病棟まではって行かなければならなくなるとき，Yakov の苦しむ姿に囚人達は同情する。作品を寓話的に解釈するならば，この同情は，Bibikov が超えられなかった限界を，Shmuel 的資質で生き抜いた Yakov の苦しみに対する評価と理解できる。そして，ここにおいて，Yakov は，人の心を動かせるような，価値のある苦しみ方が実践できる人間に成長し始めたといえる。

Bibikov の死を Shmuel 的特質で耐えたのとは対象的に，夢の中で反ユダヤ主義の犠牲者

となって死んでいるShmuelを見て，YakovはBibikov的特質をみせる。この時YakovがShmuelに向かって，"Live, Shmuel, ... live. Let me die for you."[14]と言うのは，Ducharme氏が指摘しているように，"the first selfless wish he has"[15]であり，それは，Shmuelに対する同情心から生じているようにみえる。しかし，この気持ちの根底には，善人を苦しめている社会に対する怒りが感じられ，Bibikov的な同情心の在り方が窺われるのである。

この場面でBibikov的思考が重要であることは，このすぐ後で，YakovがShmuelと同じ立場にいる他のユダヤ人について次のように考えることからも，明らかである。

Not that he is afraid to die because he is afraid of suicide, but because there is no way of keeping the consequences of his death to himself. To the goyim what one Jew is is what they all are.[16]

この一節は，他の人の運命に対して自分が負っている責任を，Yakovが自覚していることを示している。この自覚は，BibikovがYakovに訴えていた自由な社会人としての役割を果たすために必要なものであり，ついに裁判が開かれることになったとき，Bibikovが夢に現われて言う言葉，"the purpose of freedom is to creat it for others"[17]につながる。従ってYakovは，Shmuelの死を夢みる場面において，Shmuelが果たせずして死ぬ現実的な改革を，Bibikov的資質で成し遂げる方向に成長していっていると，解釈して差し支えないだろう。

以上の出来事の後，Yakovは妻Raislの訪問を受ける。そして，自分の苦しみにもかかわらず，Raislの苦境に同情し，彼女の子供を認知する手紙を書いてやる。ここにはかつての自己中心的な姿はかけらもなく，Shmuel的な，よく苦しみに耐える姿と相手を思いやる"charity"の精神が溢れている。またこの時サインを求められた偽の告白書には，"Every word is a lie."[18]と書き，検察側の虚偽に激しく抵抗する姿勢をみせて，Bibikov的な価値感を覗かせる。このような，忍耐強さと抵抗を兼ね備えた善人の態度は，Shmuelの生き方もBibikovの生き方も越えた，新たな生き方のように見える。そして，息子は父親の生を受け継ぐ寓意的存在として解釈できるので，この新たな抵抗する善人の生き方こそ，受け継がれるに足る生であり，今やYakovはその生を生き始めていると，作家は宣言しているように思われるのである。

## 5．牢獄生活の実際的意味

Yakovの牢獄生活を寓話と解釈するならば，人を思いやる心で二人の精神的父親の資質を合体させた生き方が求められていることは，明白である。しかも，作品の語りを三人称にしながらも，視点をYakovに置き，Yakovの内面を中心に話が進められているので，寓話的性格が一層強まっている。しかし，閉じられたユダヤ共同体から出てくるとすぐに牢獄につながれてしまうYakovは，現状を客観的に幅広く示すのに適切な主体ではなく，作品は事件の実際的姿を明確にしてはいない。

唯一客観的な視点を供給できただろうと思えるBibikovでさえ，ロシアで"blood

libels"[19]が禁じられた過程と，それが再び盛り返してきていることに漠然と触れ，反ユダヤ主義が事件に関係していることをほのめかす以上に，はっきりとした説明を下してはいない。だが，この事件は初めから反ユダヤ主義の様相を帯びているにしても，明らかに本質は時代錯誤の差別意識そのものではない。子供を殺害した Marfa Golov 達は，自分達の犯罪を隠すために反ユダヤ主義を利用したにすぎないし，検察官の Grubechov にしても，煉瓦工場の Proshko にしても，Yakov を犠牲にしたいと思うそれぞれの個人的理由があったことが，ほのめかされているからである。従って，事件を実際的に議論しようとすれば，彼らに反ユダヤ主義を装わせた真の理由である，それぞれの人間的欠陥と，それらが合体して冤罪を作り上げるに至る，民衆心理の利用や歴史的背景こそ，明確に論議されなくてはならなかった。ところが，Maurice Friedberg 氏によって，周辺人物が"schematic caricatures"[20]であると非難されているように，周辺人物の背景は貧弱で，それぞれの悪の性質は詮索されないまま，一様に反ユダヤ主義という名の，Yakov を虐げる道具に堕している。

ところで，作品の下敷にされた Beiliss 事件の場合も，反ユダヤ主義が利用されはしたが，それが事件の本質ではなかった。Mauris Samuel 氏が著書 *Blood Accusation* で *London Times* からの引用を用いて，事件の性格を，"a final fight for existance on the part of the innermost powers of reaction against all modern forces in Russia"[21]と説明しているように，これは封建制と民主主義の戦いだった。そして，民衆の良心と国際世論が Beiliss の釈放をもたらしたのであり，Beiliss はなんら存在意義のないわき役でしかなかった。*The Fixer* はフィクションであるから，Beiliss 事件に縛られる必要はないが，Yakov が Beiliss 同様，牢獄につながれていて何の行動も取れない以上，事件を実際に動かした人々を描かずに，事件を現実のものとして扱うことは不可能である。

このような実際的要素は，作品を寓話とみなすならば不必要と考えられるかもしれない。しかし，社会参加を要求する現実性の重要さが説かれているにもかかわらず，作品が少しも現実レベルで述べられていないことは，精神性と現実性を融和させた生き方を明確に提示できない原因になっている。現実性の欠如によるこの欠陥は，最終章で明白に現われてくるが，そこに至るまでにも，欠陥が露呈している場面がある。

Yakov は夢でシベリアに送られる囚人の姿を見，彼らに同情することがある。ところが，この囚人達の中には，Kogin の息子の姿も見られるのである。この息子の愚かな生き方は，Yakov に同情の様子を見せない獄吏，Kogin の不毛な生き方を象徴する役目を負っているにしても，父の愛情を顧みずに父を苦しめたり，特に必要とも思えないわずかなお金のために人を殺したりする非道は，Yakov の気持ちを顧みず，自分の感傷のために Yakov を苦しめている皇帝の非道と変わらない。従って，もし Kogin の息子を含めて苦しむものに同情するのであれば，Yakov は皇帝に対してもまた同情しなくてはならなかったはずである。しかしこの夢の出来事は寓話のレベルに移行して，罪人＝虐げられる者＝弱者＝善，皇帝＝虐げる者＝強者＝悪，という，きわめて単純な図式で処理され，Yakov は，囚人である Kogin の息子に，自分の苦しい姿を重ねて同情する。この結果，Yakov は虐げる者と虐げられる者を混同してしまう誤りを犯し，彼の同情は感傷的な印象をもたらす。また，この単純化のために，虐げる者が虐げられる者へ，或は，その逆に，いとも簡単に変わり得る現実を，Yakov は見逃してしまっているのである。

## 6．最終章の寓意

Yakov の内面的成長の最終結果が期待される最終章も，寓意的に理解されれば，それなりに深みをもった読みができる。例えば，裁判に向かう途中，Yakov は皇帝と対面する幻想を見る。その時 Yakov と皇帝が交わす会話において，皇帝は血友病の息子を抱えていることを告げ，血友病の子供が出血で死ぬようなやり方で，Yakov 事件の子供が殺されたことを指摘して，両者の共通性を示唆する。Yakov が後に，皇太子の血に大切なものが欠けているのと同じように，皇帝はその性質に "charity" を欠いていると進言することから，血友病の皇太子は皇帝の不毛な生き方を象徴していることを示す。ひるがえせば，これは，Yakov 事件が Yakov の不毛な人生に対する告発という寓意を含んでいたことを暗示する。そして，牢獄の苦しみを経て "charity" を学び，息子を得た Yakov に対し，未だ血友病の息子の心配をしなければならない皇帝は，かつての Yakov の姿を映しているとみなせる。

実際，皇帝が自分を弁護する言葉は，作品の初めの Yakov の言葉に微妙に重ねられている。例えば，"I never wanted the crown"[22]と自分の運命の重荷を嘆く皇帝は，自分の不幸を，"I did nothing. It was a gift. I'm innocent."[23]と主張する Yakov と同じように，運命に責任を転嫁している。さらに，"To rule is to bear a heavy cross. I've made mistakes, ... but what can a man do beyond the best he can?"[24]と述べ，人間の能力が限られたものであると主張することで，自分の無為を弁明する皇帝は，政治的関心の重要性を Bibikov から指摘されたとき，次のように答えて Bibikov を失望させる Yakov と同じである。

... if you're poor your time is taken up with other things that I don't have to mention. You let those who can, worry about the ins and outs of politics.[25]

幻想の中の皇帝を，不毛な生き方をしていたかつての Yakov とみなせば，皇帝の自己弁護に対して，" You had your chances and pissed them away. There's no argument against that."[26]と，Yakov が非常に厳しく応じたとしても，これは，かつての自分の身勝手さに対する深い反省を表わしていると理解され得る。同様に，"What the Tsar deserves is a bullet in the gut. Better him than us."[27]と述べて皇帝を殺害するのも，かつての自分の生き方との決別とみなすことができるだろう。

さらに，二人の対話は，虐げる者と虐げられる者との対決でもある。そして，権力側の最高地位にいる皇帝は，反ユダヤ主義で象徴される虐げる側の頂点に立つ者であり，政治的道徳的生き方をする者を阻む最後の障壁とみなされ得る。そこで，皇帝を厳しく否定し，殺害することは，政治的行動が取れる善人になるための，最終儀式の性格を帯びているともいえる。

## 7．最終章の実際的意味

以上のように，最終章に表わされた皇帝殺害を，Yakov の夢の中で起こったこととして，

寓話レベルでのみ解釈すれば，非常に効果的にみえる。しかも，作品の大半を費やして Yakov の苦しみが被虐的に長々と描かれた後では，Raisl の子供を認知するほどの深い同情心を見せた Yakov が，自分を現在の苦境に陥れた者に対して，"I forgive no one."[28]とか，"What's left of my heart is pure rock."[29]と頑なであることも正当化されてみえるし，皇帝に対する Yakov の態度も当然のように思われるかもしれない。しかし，Yakov が考える皇帝は，あくまで，自分の意識によって都合よく作り出された，架空の存在でしかない。

Yakov 事件が寓話的構成に流れて，現実の事件として把握されていないように，ここでも，実際に皇帝を取り巻き，彼の行動を左右していたに違いない，複雑な情勢や社会的立場は述べられていない。それ故，かつて Raisl の立場で物を見ることができなかったように，Yakov はまた，皇帝の立場で物を見れていないのではないかと危ぶまれる。そして，かつて Shmuel の助言に耳を貸さず，かたくなに Raisl を責め，そのために Raisl も自分も傷つけてしまったように，ふたたびかたくなな怒りで，過去の過ちを繰り返しているのではないかと，懸念されるのである。

実際，少しでも皇帝の人間としての生の姿に触れられたなら，もっと皇帝の立場に立って事態を検討し，事件の収拾の道を模索することができただろう。また，どうしても皇帝を殺さなければならないなら，殺す自分も罪を背負っていることを自覚し，決して意気揚々とはしなかっただろう。自分の苦しみにもかかわらず，そこまで相手の心に入れて初めて，人は真の同情心を学んでいるとみなされるべきであるが，物語が全体として寓話レベルで進行し，皇帝を寓話的人物に単純化してしまったために，Yakov は真の同情を示すことができないままで終わっている。1975年の *Renascence* で，John Desmond 氏が次のように批判したとき，氏は Yakov のこの欠陥を意識していたに違いない。

Yakov becomes the modern "compassionate man," but it is not a compassion which touches the heart of evil and transforms it, as the real Christ's does.[30]

ところで，皇帝の殺害が Yakov の幻想であり，寓話レベルに移行しているとはいえ，現実と夢との境がほとんどなくなってしまっている最終章において，Yakov の皇帝殺害の現実的意味が全く無視されているというのではない。作家はこの行為の欠点を，彼を止めようとする Bibikov によって表わしている。

Pointing the gun at the Tsar's heart (though Bibikov, flailing his white arms, cried no no no no), Yakov pressed the trigger.[31]

しかし，Bibikov の阻止が括弧付きで述べられていることは象徴的で，Yakov は Bibikov の阻止を影のようにすり抜けている印象を与える。つまり，Bibikov の介入は，Yakov の問題点を追求したり，よりよい生き方をさらに模索したりするものではなく，単なる批判のポーズでしかない。そして，Desmond 氏が Bibikov のこの描写について，"it asks us to overlook the complex philosophical argument presented in the book"[32]と批判しているように，このような Bibikov の描写を挿入することは，Yakov が完全ではないにしても，他

にどうしようもないのだと，作家がYakovの行為の実際的な欠陥を弁護しているようにさえ感じさせる。ところが，ここで回避された問題は，道徳性と社会性を現実にどう折り合わせるかという点に関わっており，この問題が解決されなければ，Yakovが主張する，政治参加のできる善人の生き方を実行に移すことは不可能なのである。

## 8．現実問題を処理できなかった寓話の構成

Shmuel，Bibikov，Yakovのそれぞれの生き方について，作家は，彼らの良さが現実にどのような欠点を持ち，どこまでしか作用できないか，実に厳しい目で評価している。しかし，人を思いやる心を軸に，Shmuelの精神性とBibikovの実際性がYakovにおいて成就される過程や，その結果について述べるとき，作家は現実問題から一歩後退し，寓話的枠組みを使用した。このことにより，作家の主張は明確に提示されたが，作品の様々な現実問題は単純化され，弱者を犠牲にすることをはばからない現実に立ち向かう真の困難を無視した，安易な社会参加を呼びかける結果を生み出した。

実際，現実的な目で判断すれば，この作品でYakovが行なっていることは，他の人々のために耐えて生きることだけである。彼は耐えることで，自分の回りの良いものが動きだして実を結ぶ機会をつぶさないようにしてはいるが，それ以上のことは何もしていない。そして，このようにじっと耐えて，良いものが生まれる機会を少しでも守っていこうとする生き方は，Malamudの初期の主人公に共通してみられた生き方であり，自分から何かを作り出そうとして政治の中に突進して行く主人公のものでは，決してない。つまり，Ratner氏やDucharme氏が考えたほど，Yakovは以前の主人公から進歩してはいないのである。それでいて社会的行動につっぱしったが故に，Elkin氏やGunn氏が感じたような批判が生じたに違いない。

結局，Malamudは*The Fixer*においても，道徳的寓話作家の域を出てはいない。悪政に抵抗する善人という新たな主人公を生み出そうとした努力は認められるが，実際にどのような力が社会や個人，また歴史を動かすのか論じることはできなかった。そして，反ユダヤ主義や権力者の行為を，道徳者が越えなければならない悪の象徴として利用してしまったため，現実的視点からすれば大きな問題を残す行為を是認したり，実際に道徳的に政治に参加しようとすれば直面しなくてはならない問題を避けてしまったりしている。このため，寓話レベルでYakovの同情心が評価され，今やYakovの苦しみは，積極的に善を拡大するために悪に抵抗する社会変革に向けられた，と主張されても，それは所詮，現実味を欠いた机上の戦法のようにしか響かない。そして，Yakovは，安易で見かけだけ勇ましい主人公としか思われないのである。

## 註

1．Marc L. Ratner, "The Humanism of Malamud's *The Fixer*," *Critique*, IX (1967) 81.

2．Robert Ducharme, *Art and Idea in the Novels of Bernard Malamud* (The Hague: Mouton & Co., 1974) 95-97.

3. Stanley Elkin, "The Fixer," *Massachusetts Review*, IX (Spring, 1967) 389.
4. Giles B. Gunn, "Bernard Malamud and the High Cost of Living," *Adversity and Grace: Studies in Recent American Literature*, ed., Nathan A. Scott Jr. (Chicago: University of Chicago Press, 1968) 81-82.
5. Bernard Malamud, *The Fixer* (New York: Farrar, Straus and Giroux, 1966) 7.
6. Bernard Malamud, *The Fixer*, 10.
7. Bernard Malamud, *The Fixer*, 9.
8. Bernard Malamud, *The Fixer*, 78.
9. Jeffrey Helterman, *Bernard Malamud* (South Carolina: the University of South Carolina Press, 1985) 70.
10. Bernard Malamud, *The Fixer*, 77.
11. Bernard Malamud, *The Fixer*, 17.
12. Bernard Malamud, *The Fixer*, 9.
13. Bernard Malamud, *The Fixer*, 45.
14. Bernard Malamud, *The Fixer*, 272.
15. Robert Ducharme, *Art and Idea in the Novels of Bernard Malamud*, 95.
16. Bernard Malamud, *The Fixer*, 273.
17. Bernard Malamud, *The Fixer*, 319.
18. Bernard Malamud, *The Fixer*, 292.
19. Bernard Malamud, *The Fixer*, 172.
20. Maurice Friedberg, "History and Imagination : Two Views of the Beiliss Case", *Midstream*, XII (November, 1966) 73.
21. Mauris Samuel, *Blood Accusation: The Strange History of the Beiliss Case* (New York: Alfred A. Knopf, 1966) 181.
22. Bernard Malamud, *The Fixer*, 332.
23. Bernard Malamud, *The Fixer*, 7.
24. Bernard Malamud, *The Fixer*, 332.
25. Bernard Malamud, *The Fixer*, 78.
26. Bernard Malamud, *The Fixer*, 333.
27. Bernard Malamud, *The Fixer*, 334.
28. Bernard Malamud, *The Fixer*, 236.
29. Bernard Malamud, *The Fixer*, 259.
30. John Desmond, "Malamud's Fixer: Jew, Christian, or Modern?," *Renascence*, 27 (1975) 109.
31. Bernard Malamud, *The Fixer*, 334.
32. John Desmond, "Malamud's Fixer: Jew, Christian, or Modern?," 103.